

## 論文

## 幽霊と参加

小林久高<sup>1)</sup>・猿渡 壮<sup>2)</sup>

**要約：**「幽霊を信じる人ほど投票に行ったりボランティア活動をしたりする傾向がある」などと言えば、多くの人は不思議に思うに違いない。本稿の目的は、この奇妙な命題が真実であること、ならびに、この奇妙な命題が成り立つメカニズムについて、計量データを用いて明らかにすることにある。

議論ではまず、霊的意識、政治参加、社会参加の間にプラスの相関関係が存在することが示される。次いで、霊的意識が自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性と関連していることが確認され、それらが人間の社会性や身体性に根ざした環境との結合に関わる原初的な意識であることが示唆される。最後に、この原初的な意識が参加を促す1つの道筋について、同類への愛着との関係を考慮しつつ分析される。

人の政治活動や社会活動への参加の理由を個人の合理的な利益追求に求めるという観点は重要に違いない。しかしながら、参加を目的合理的な利益実現行動とする視点からは説明できない現象が存在することも事実である。本稿では、「幽霊と参加」という問題を分析することによって、政治参加や社会参加の背後に、個人利益の合理的追求には還元できない世界が存在することを示すものである。

**キーワード：**政治参加、社会参加、公共的活動、霊的意識、デュルケム

## 目次

1. はじめに
2. 政治参加と社会参加の説明変数
  - 2-1. 政治参加の説明変数
  - 2-2. 社会参加の説明変数
3. 参加と霊的な意識の測定
  - 3-1. 事実の確認
  - 3-2. 霊的な意識の測り方
  - 3-3. 参加の測り方
4. 参加と霊的な意識の関係
  - 4-1. 参加と霊的な意識の関係
  - 4-2. 霊的な意識が参加に及ぼす力

1) 同志社大学社会学部教授

2) 同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

\*2014年6月27日受付、2014年6月28日掲載決定

5. 霊的な意識とはどんな意識か
  - 5-1. 霊的な意識と関係の深い意識
  - 5-2. 原初的意識
6. 原初的意識が参加を生み出す過程
  - 6-1. 原初的諸意識と参加の関係
  - 6-2. 問われるべき問題
  - 6-3. 原初的意識と同類への愛着の指標
  - 6-4. 原初的意識が参加をもたらす1つの道筋
7. おわりに

## 1. はじめに

「幽霊を信じる人ほど投票に行く傾向がある」などと言うと、「何を馬鹿なことを言っているのだ」と言われるだろう。しかし、これはおそらく本当のことである。「幽霊を信じる人ほどボランティア活動をする傾向がある」などと言う者がいたら、妙なことを言うなと思われるかもしれない。しかし、これもおそらく本当のことであり、「本当さ」の程度は、最初のものよりもより強い。本稿はこれら一見すると奇妙なことについて、それが本当のことだと言えるのかどうか、それはどう説明されるのか、といったことを検討するものである。

数年来、政治参加や社会参加に影響するさまざまな変数について検討を続けてきたわれわれは、常識的には予測できない関連がいくつかの変数と政治参加・社会参加の間にあると感じていた。それらの中で、もっとも象徴的な不思議さをもつものがこの「幽霊と参加」に関わるものだった。「幽霊を信じる人ほど投票に行ったりボランティア活動をしたがる傾向がある」のはなぜなのか。これを明らかにすることは、確かに面白みがある。しかしその面白みだけでなく、この不思議な関係を説明できるならば、幽霊と参加という個別の問題を超えて、政治参加や社会参加の背後にあるものがより明確になるのではないか。われわれはそんな思いで研究を進めてきたのである<sup>(1)</sup>。

以下、この「幽霊と参加」の問題に関して、計量分析と概念的な検討を行い、その内実を明らかにしていく。分析されるデータは大学生を対象として得られたものだ。本来は、より大規模なデータを使って分析をするのが望ましいのはもちろんである。しかし、「幽霊と参加」などという風変わりなことを検討できるような既存大規模データはほとんどないだろう。そんなとき、学生を対象とした探索的な調査は機動的でとても役に立つ。ただし、分析がうまくいったとしても、提出された仮説が「一般的に」検証できたとして「強く」主張できるわけではない。だから分析はむしろ、1つの仮説を生み出す作業と考えなくてはならない。

よく、質的調査は仮説索出に、量的調査は仮説検証に向いているとされる（谷

2008)。それは正しいと思うのだが、量的分析の場合も「なぜこんな結果が出るのだろう」「どう考えればいいのだろう」「別の分析をしたらどうなるのだろう」などといった「仮説の再構築と再分析の繰り返し」を通して、当初考えもしていなかったような新しい仮説が導き出せることもあるのである。本稿はそういった試行錯誤から得られたものであり、人びとの社会意識の深層にあるいわば地下水脈がどうなっているのかということについての1つの仮説を提出しようとするものである。

## 2. 政治参加と社会参加の説明変数

### 2-1. 政治参加の説明変数

本稿の「幽霊と参加」というテーマの、研究上の位置を明らかにするために、参加がこれまで主にどのような変数との関係で論じられてきたかを簡単にまとめておこう。ここでは参加を政治参加と社会参加に分けて見ていくことにする。

まず政治参加について。投票やその他の政治活動への参加と社会的属性の関係について、よく知られた次のような事実がある。すなわち、若者よりも中高年層は政治に参加していること、農林漁業等の特定の職業の人が参加に積極的であること、郡部に住む人は市部の人よりも政治活動を行っていること、集団への所属が政治参加を高めること、などである（蒲島 1988；小林 2000，ほか）。これら属性的な要因の他にも、政治的関心や政党支持、政治的有効性感覚といった意識が参加と関係することもしばしば指摘される。属性や意識と政治参加との間のこういった関係については、「関係がある」といった指摘はなされても、なぜそのような関係があるのかということの説明がきちんとされないことが多い。ここでは、そうした関係がなぜ生じるのかを一から考えるところからスタートしよう。

参加にはコストが伴うことが一般的である。政治集会に出かけること、候補者の選挙活動を応援することなどにはコストが伴うし、投票に行くといった行為であっても多少のコストがかかっている。そんなコストがかかる行為をなぜ行なうのかということについて、そのコストを払ってでも獲得できる利益があるからだとする考えがある。すなわち、個人的な利益が実現されるがゆえに政治に参加するという考えである。

このような考えから、参加と上記の属性・意識との関係を説明するとこうなる。農林漁業などの特定の職業をもつ者が参加に積極的であるのは、(1) 人は自己の個人的利益を追求するものであり、(2) この個人的利益は職業的な利益に直結しており、(3) 特定の職業的利益は政治に左右されやすい性質をもっており、それゆえ、(4) 政治参加を通して、自己の職業的利益の実現、ひいては個人的利益の実現を目指すからである。簡単に言うと、農林漁業層が政治参加に積極的であったり、職業団体に所属する者が政治参

加に積極的であったりするの、究極的には個人の利益実現のためなのである。利益追求という観点からは、若年層が政治参加に積極的でないことの理由について、次のような説明がなされるだろう。すなわち、若者にとって自己の利害と政治との結びつきは弱く、そのため政治参加を通じた利益実現への要求も弱いためであると。また、政治的有効性感覚の低い人の政治参加の低調さも、同様の考えから説明される。政治参加が有効だという認識をもてなければ、その人にとって参加は単なるコストの浪費に過ぎない。そのため、政治参加の程度は低調にならざるを得ないとされるのである。

政治参加を目的合理的な利益実現行動とする観点はさまざまな場面で事実を説得的に説明する。しかし、この観点ではどうにも説明がむずかしい現象も存在する。居住地域と政治参加の関連や、さまざまな集団所属と政治参加の関連などがその例だろう。日本では、市部に住む人よりも郡部に住む人が政治参加に積極的であることが知られている。この原因は、(1) 市部と郡部の職業構造の違いと、(2) 上に述べた職業的利益から説明されそうである。郡部には市部よりも多く農林漁業層の人びとがおり、その人たちは職業的利益追求に積極的であるため、市部よりも郡部で政治参加が活発になる、という説明である。しかし実は、この考えはあたらぬ。どのような職業を見ても、郡部での政治参加の程度は市部での政治参加の程度を上回るからである（蒲島 1988： 145）。市部よりも郡部で政治参加が活発であるということについて、職業的利益の追求という観点から説明することは少々難しいのである。

また筆者の一人は、農林漁業団体や労働組合、町内会、宗教団体、PTA、趣味のグループなど、さまざまな集団への加入が政治参加を高めていることを明らかにしたことがあるが、趣味のグループへの加入が政治参加と関連することまで、(1) 個人的利益の追求、(2) 個人的利益と趣味のグループの利益の合致、(3) 趣味と政治との関連、(4) 政治参加の実現、という一連の流れで説明することは困難だろう（小林 2000）。

人びとの政治参加の背後に、利益獲得に対する要求という問題が潜んでいるのは間違いない。しかし同時に、目的合理的な利益実現行動として政治参加を把握する観点からは説明ができない現象もあることは、確かだと思われるのである。

## 2-2. 社会参加の説明変数

次に、社会活動への参加の要因について。社会活動への参加を個人利益の合理的追求として説明することは、政治参加以上に難しい。社会活動は、本来的に「他の人びとや社会のため」という性質をもつからである。しかし、徹底した合理主義者であれば次のように言うかもしれない。ある種の契約社会を想定すれば、将来利益が自己に還元されることを予測して個人が現在コストを支払うことは十分考えられる。そのため、個人の合理的利益追求から社会参加を説明することは十分可能であると。こうした考えに基づ

けば、人は高齢者になってサービスを受けるために高齢者に関わるボランティアをし、障害者になったときにサービスを受けるために障害者に関わるボランティアをし、災害にあったときにサービスを受けるために、災害ボランティアの活動をする、ということになる。

「情けは人のためならず」という諺もあるように、人がこうした利益計算から社会活動をする場合もないわけではないだろう。ただ上記のような説明は、人の合理的な利益計算の他に、ある重大な前提を置いていることに注意しておく必要がある。それは、自己がコストを払えば人びとや社会はお返しをしてくれるという前提であり、人びとの間に互酬的な関係が成立しているという前提である。かなり徹底した合理主義者であれば、こうした互酬性そのものについても利益計算から説明するかもしれない。しかし、計算可能な利益という観点から互酬性を説明し、さらにはそれをもとに社会参加を説明しようと思えば、参加に実際に影響する大きな要因を見逃してしまうことも事実だと思われる。社会参加と階層の関係についての K パターン説を提唱した鈴木広は、下層に見られる「伝統的ないしは自然発生的な相互扶助の慣行」は人びとが感じる「義理」や「衆生の恩」のような感覚によって支えられているとするが（鈴木 1987）、社会活動を支えるこのような感覚は、計算可能な利益追求とは少し離れたところにあるものだからである。政治参加の場合と同様、社会参加を考える際にも、合理的な利益追求という観点は1つの必要な観点かもしれない。しかし社会参加の場合にも、合理的な利益追求だけでは説明できない部分が存在していることは確かだと思われるのである。

以上の議論を踏まえ、本稿の位置づけを述べると次のようになる。参加の問題には、人びとの合理的志向性からは説明できない部分が存在している。そして、本稿で扱われる「幽霊はいる」といった意識は、人びとの合理的志向性の外にある要因の中でも、極めて非合理的なものの1つである。その非合理的なものの参加への影響を検討することで、参加の背後に隠された世界をわれわれは知ることができる<sup>(2)</sup>。それは、参加の深層にある要因を探る試みだと言ってもいい。「幽霊と参加」の問題を検討することは、従来あまり考慮されてこなかった政治参加や社会参加の深層にある要因を探求することにはかならないのである。

### 3. 参加と霊的な意識の測定

#### 3-1. 事実の確認

「幽霊と参加」の問題について、まず事実の確認をしておこう<sup>(3)</sup>。われわれの調査には、「幽霊がいる」という問い、ならびに「選挙権があれば、多少体調が悪くても選挙に行くと思う」という問いがあり、それらに対して、「そう思う」から「そう思わない」

まで5段階での回答が求められている。また、「ホームレスへの炊き出し活動」について、「参加したい」から「参加したくない」まで5段階での回答が求められている。これら3つの問いへの回答について、「そう思う」「ややそう思う」（「参加したい」「やや参加したい」）を1つのカテゴリーに統合し、その他の回答をもう1つのカテゴリーに統合して作られたものが表1と表2である。

表1 幽霊と政治参加

	体調不良時でも選挙に		計	N
	行く	行かない どちらでもない		
幽霊はいる	58.6	41.4	100.0	(133)
幽霊はいない どちらでもない	45.9	54.1	100.0	(159)
計	51.7	48.3	100.0	(292)

カイ2乗値 = 4.703  $p = .030$

表2 幽霊と社会参加

	ホームレスへの炊き出し活動に		計	N
	参加したい	参加したくない どちらでもない		
幽霊はいる	42.2	57.8	100.0	(135)
幽霊はいない どちらでもない	19.1	80.9	100.0	(162)
計	29.6	70.4	100.0	(297)

カイ2乗値 = 18.823  $p = .000$

表からは、「幽霊がいる」と思う人ほど選挙への意欲があることがわかる。また、「幽霊がいる」と思う人の社会活動への意欲は、そうでない人に比べかなり強いこともわかる。これらのことは、反応カテゴリーに1～5の得点を与えて計算した相関係数からも言える。幽霊と選挙、幽霊と炊き出しの関係はそれぞれ0.199, 0.259（ともに  $p < 0.01$ ,  $N = 291$ ）となっているのである。意欲が行動を決定する大きな要因であると考えれば、本稿の最初で述べた「幽霊を信じる人ほど投票に行く傾向がある」「幽霊を信じる人ほどボランティア活動をする傾向がある」という2つの命題は信じるに足るものと言える。ではなぜこのようなことになるのか。以下では計量分析を交え、この問題をより広い文脈の中で検討することにしよう。分析に先立ち、まず、霊的な意識と参加の測定法について述べておこう。

### 3-2. 霊的な意識の測り方

われわれの調査には、すでに見た「幽霊はいる」という項目だけでなく、ほかに「神

社や寺、教会などに行くと、心が洗われる感じがする」「仏壇や神棚、十字架のようなものを見ると手を合わせたくなる」「たたりはある」といった項目があり、それぞれ「そう思う」から「そう思わない」までの5反応形式で回答が求められている。これら4つの項目全体の構造を探るために行った主成分分析の結果が表3に示されている。表を見るとわかるように、全体の分散の52.9%が第1主成分で説明されており、その主成分と各項目の間にはかなり強い相関が認められる。ここから、第1主成分は霊的な意識一般に関わるものであると考えることができる。したがって、この第1主成分の主成分得点を霊的意識スコアとする。霊的意識スコアは霊的な意識一般を測るものであり、平均は0、分散は1である。

表3 霊的な意識の主成分分析

主成分	分散の説明率			主成分との相関（負荷量）			
	固有値	分散の%	累積%	a. 神社や寺、教会などに行くと、心が洗われる感じがする	b. 仏壇や神棚、十字架のようなものを見ると手を合わせたくなる	c. 幽霊はいる	d. たたりはある
1	2.12	52.90	52.90	.699	.707	.749	.752
2	1.11	27.65	80.54	.549	.537	-.510	-.506
3	.46	11.59	92.13	.409	-.410	.256	-.250
4	.31	7.87	100.00	.207	-.210	-.335	.339

ところで、表3の第2主成分まで見てみると、4つの項目が2つのグループに分かれることがわかる。すなわち、第2主成分との相関は、「神社や寺、教会などに行くと、心が洗われる感じがする」と「仏壇や神棚、十字架のようなものを見ると手を合わせたくなる」ではプラスに、「幽霊はいる」「たたりはある」ではマイナスになっているのである。両グループは概念的にも性質を異にすると考えることができる。前者は、霊的なものに関わる感覚であり、後者は霊的なものに関わる信念だからである。それゆえ、これら2つのグループについて、次のように霊的感覚スコアと霊的信念スコアを作成し、霊的意識全体とは別に分析に用いることにしよう。すなわち、霊的感覚スコアは、「神社や寺、教会などに行くと、心が洗われる感じがする」と「仏壇や神棚、十字架のようなものを見ると手を合わせたくなる」の2項目を主成分分析にかけ、得られた第1主成分の主成分得点である<sup>(4)</sup>。また、霊的信念スコアは、「幽霊はいる」と「たたりはある」の2項目を主成分分析にかけ、得られた第1主成分の主成分得点である<sup>(5)</sup>。

以上の指標を用いて得られた霊的意識、霊的感覚、霊的信念の間の関係は表4に示されている。霊的意識は霊的感覚、霊的信念とともに0.8程度の強い相関をもつ。霊的感覚と霊的信念の間の相関は0.31程度である。

表 4 霊性 3 指標の相関

	霊的意識	霊的感觉	霊的信念
霊的意識	1.000	.791**	.828**
霊的感觉	.791**	1.000	.313**
霊的信念	.828**	.313**	1.000

N = 295

\*\*p&lt;.01

### 3-3. 参加の測り方

次に、参加の指標について考えよう。まず政治参加について。われわれの調査には、すでに述べた「選挙権があれば、多少体調が悪くても選挙に行くと思う」という項目のほかに、「選挙権があれば、天気が悪くても選挙に行くと思う」という 5 段階回答式の問いがある。政治参加を測定するに際して、この 2 つの項目を主成分分析にかけ、その第 1 主成分得点を政治参加スコアとする<sup>(6)</sup>。

社会参加については、調査には上で述べた「ホームレスへの炊き出し活動」のほかに、「地域の祭りや行事」「近隣の清掃活動」「災害被災地の復興活動」「老人ホームでの手伝い」「刑務所への慰問活動」「障害者施設での手伝い」について、「参加したい」から「参加したくない」まで 5 段階でたずねる項目がある。社会参加を測定するに際しては、これら 7 項目の第 1 主成分得点を社会参加スコアとする<sup>(7)</sup>。政治参加と社会参加の間には相関が認められ、その値は 0.174 ( $p<0.01$ ,  $N=291$ ) である。

## 4. 参加と霊的な意識の関係

### 4-1. 参加と霊的な意識の関係

以上の指標を用いて、霊的な意識と政治参加、社会参加の関係を見たものが表 5 である。表からは、霊的意識とその下位指標である霊的感觉、霊的信念すべてが、政治参加、社会参加に関連していることがわかる<sup>(8)</sup>。

表 5 霊的な意識と参加の相関

	政治参加	社会参加
霊的意識	.268**	.391**
霊的感觉	.206**	.342**
霊的信念	.229**	.296**

N = 289

\*\*p&lt;.01

このことを別の視点から表したものが表 6 である。ここでは、調査対象が、霊的意識の強いもの、中程度のもの、弱いものに 3 分割され、それぞれの参加の程度の平均が示されている。この表からも、霊的意識の強いものは政治参加や社会参加の程度が強いこ



とがわかる。以上より、単に「幽霊はいる」という個別的な意識でなく、それを包含する霊的意識一般が政治参加や社会参加に影響していることがわかるのである。

表 6 霊的な意識と参加（平均）

	政治参加		社会参加	
	平均値	N	平均値	N
霊性弱	-.318	(96)	-.449	(98)
霊性中	.007	(98)	.078	(98)
霊性強	.296	(97)	.363	(97)
合計	-.004	(291)	-.004	(293)
F 値	9.620		18.402	
有意確率	.000		.000	

#### 4-2. 霊的な意識が参加に及ぼす力

ところで、霊的意識が参加に影響するにしても、その影響がわずかなものであるならば、「参加にとって霊的な意識が重要だ」などと主張するのは誇大表現ということになるだろう。その意味で、霊的な意識がどの程度参加に影響するものなのかについて検討しておくほうがいい。残念ながら、調査には参加の影響要因としてよく議論される項目はあまりないが、政治不満と不公平感という意識項目が含まれている。参加の議論においてよく取り上げられるこれらの変数と比べ、霊的な意識はどの程度参加に効果を持っているのか確認しておくことにしよう。政治不満は、「今の政治には満足できない」への回答、不公平感「今の日本は不公平なことが多い」への回答からとらえられている。双方とも、「そう思う」（5点）から「そう思わない」（1点）までの5反応の回答形式であり、それらの得点をそれぞれ、政治不満スコア、不公平感スコアとする。

表7は、政治参加と社会参加を政治不満、不公平感、霊的意識から説明する重回帰分析の結果を示したものである。ここから、政治参加には政治不満がかなりの影響を与えていること、社会参加には不公平感が一定の影響を与えていることが読み取れる。霊的意識に関しては、政治参加においては政治不満ほどの影響力はもたないが、それでも一定の影響を与えていることが読み取れる。また、社会参加においては、霊的意識の効果は不公平感の効果よりも大きいと言える。政治参加、社会参加のいずれを見ても、霊的な意識は、参加の取るに足らない要因とは言えず、一定の働きを示していることが、この表よりわかるのである。

ところで、不満が政治参加に、不公平感が社会参加に影響を与える理由を考えることはさほど難しいことではない。政治への不満から現状変革への意志が生じ、政治への参加が促されると考えられるし、社会の不公平さを知っているから、苦しい立場に立つ人びとに対するさまざまな活動に参加すると考えられるからである。しかし、霊的意識が参加を促す理由については、政治不満や不公平感の場合と異なり、簡単に述べることは

できない。何か不思議な理由がありそうなのである。

表7 霊的な意識の効果

	政治参加	社会参加
	$\beta$	$\beta$
政治不満	.301**	-.066
不公平感	.003	.138*
霊的意識	.188**	.373**
R <sup>2</sup> 乗	.155	.166
調整済 R <sup>2</sup> 乗	.146	.158
N	288	286

\*\*p<.01 \*p<.05

## 5. 霊的な意識とはどんな意識か

### 5-1. 霊的な意識と関係の深い意識

霊的意識が参加を促す理由を明らかにするためには、霊的意識というものについてのもう少し明確な像が必要である。ここでは、霊的意識にどのような他の意識が関連するのか、ということを検討することによって、霊的な意識の輪郭をもっとはっきりさせよう。

表8は、調査の中で、霊的意識と関連の深かった諸項目について、霊的意識との関連性を示したものである。まず、霊的な意識の強いものは、弱いものに比べて「星を見るのは好きだ」、「森を歩くのは好きだ」と答える傾向がある。これらを自然志向と名づけるならば、霊的意識の強いものは自然志向が強いということになる。

霊的な意識の強いものは、「日の丸が焼かれたり傷つけられたりするのを見るとつらい気持ちになる」傾向がある。また、子どもの頃、「大事な宝物を持っていた」と答える傾向も存在する。この2つに共通するものは、ある物を「宝物」だと考える意識だろう。この意識の強いものは、さまざまな物を大事な「宝物」と感じる。ちょっとした木切れや旗、マークの書かれた布切れなども「宝物」になってしまう。こういった意識を「象徴志向」と名づけるならば、霊的意識の強いものは象徴志向も強いということになる。

霊的な意識の強いものは、「小学校の行事は楽しかった」「学校の行事に積極的に参加していた」と答える傾向もある。彼らは、「行事」というものについて、プラスの反応をするのである。この傾向は儀礼志向と呼べるが、霊的意識の強いものは儀礼志向も強いと言える。

霊的意識の強いものは、「お祭りやスポーツ観戦などで盛り上がっている人たちを見ると、自分も一緒に騒ぎたくなる」傾向があり、「人が楽しそうにしているのを見ると、

ついつい自分も嬉しくなってしまう」傾向がある。こういった性質は、人の持つ共振性と言っていいだろう。あくびや笑いが人と人の間に伝染するといったことがしばしば言われるが、この伝染は他者に共振してしまう自己を前提としている。霊的意識の強いものは共振性も強い。

表 8 霊的な意識に関わりの深い意識

		霊性弱	霊性中	霊性強	合計	F	p
自然志向	星を見るのは好きだ	4.112 (98)	4.354 (99)	4.500 (98)	4.322 (295)	4.752	.009
	森を歩くのは好きだ	3.510 (98)	3.980 (99)	4.194 (98)	3.895 (295)	9.571	.000
象徴志向	日の丸が焼かれたり傷つけられたりするのを見るとつらい気持ちになる	3.175 (97)	3.755 (98)	3.773 (97)	3.568 (292)	6.982	.001
	大事な宝物を持っていた（子どもの頃）	3.418 (98)	3.753 (97)	3.765 (98)	3.645 (293)	2.499	.084
儀礼志向	小学校の行事は楽しかった（子どもの頃）	3.867 (98)	4.121 (99)	4.357 (98)	4.115 (295)	5.360	.005
	学校の行事には積極的に参加していた（高校生の頃）	3.286 (98)	3.919 (99)	3.908 (98)	3.705 (295)	7.606	.001
共振性	お祭りやスポーツ観戦などで盛り上がっている人たちをみると、自分も一緒に騒ぎたくなる	3.316 (98)	3.566 (99)	3.735 (98)	3.539 (295)	2.705	.069
	人が楽しそうにしているのを見ると、ついつい自分も嬉しくなってしまう	3.612 (98)	3.879 (99)	4.173 (98)	3.888 (295)	8.175	.000

( ) は実数

## 5-2. 原初的意識

表 8 にあった自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性について、それぞれ 2 項目の合成得点を主成分得点として算出し、相互の相関を算出したものが表 9 である。表からは、すべての意識の間に相関があり、とりわけ共振性と他の意識である霊的意識、自然志向、象徴志向、儀礼志向との相関が高いことが読み取れる。それは、自然や超自然的なものへ共振や、象徴や儀礼への共振が、自然志向、霊的志向、象徴志向、儀礼志向を支えていることを意味していると思われる。

表 9 霊的意識と他の意識の相関

	霊的意識	自然志向	象徴志向	儀礼志向	共振性
霊的意識	1.000	.277**	.250**	.208**	.537**
自然志向	.277**	1.000	.187**	.155**	.301**
象徴志向	.250**	.187**	1.000	.258**	.346**
儀礼志向	.208**	.155**	.258**	1.000	.481**
共振性	.537**	.301**	.346**	.481**	1.000

N = 290

\*\*p < .01

この一群の意識の正体はいったい何なのか。デュルケムは『宗教生活の原初形態』において、「聖と俗との事物の区分、靈魂、精霊、神話的人格、国民的な、あるいは、国際的な神性の観念、消極的礼拝とその誇張された形態である禁欲的行事、奉獻とコミュニオンとの儀礼、模倣的儀礼、記念的儀礼、贖罪的儀礼等々」が、原初的な宗教の基底にも、最も進化した宗教の基底にも見られるとした（Durkheim 1912=1975：下 321）。われわれのここで見えてきた諸意識は、ここでデュルケムの述べている「宗教的な基底」に大部分重なっている。デュルケムはまた、「人間の宗教性は、人間の顕著な社会性の結果の1つ」だとするが、そうであるならば、靈的意識、自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性といった意識は、社会的動物としてのヒトの深層にある根源的な意識と考えてもよさそうである（Durkheim 1893=1989：下 192）。これらの意識は、人間の社会性や身体性に根ざした環境との結合に関わる根本的な意識だと思われるのである。

この一群の意識にいかなる命名をするか、われわれは悩んだが、結局、単に「原初的意識」と呼ぶことにした。ユングの「原型」やフロイトの「イド」もそうだが、根源的な意識に名前をつけることは難しい。こういった意識は原初的であるがゆえに、どんな修飾語も拒むからである。

原初的意識は人の深層にある根源的意識であるが、深層に潜み続けるものではない。それは、さまざまな場所で人の反応や行動に影響を与える。データ分析から靈的意識に関わる自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性という要素を導出してきてわれわれが感じたのは、「これは宮崎駿の『となりのトトロ』の世界ではないか！」ということだった。自然の中で、大事な宝物を持って、儀礼を行い、超自然的なものとも共振する主人公たちの姿は、まさにこの原初的意識を体現している。数々の宮崎アニメの人気の秘密は、作品の中での主人公たちの自然、象徴、儀礼、超自然的なものとの共振が、見るものに原初的な感動（共振）を与えるところにあるのだ。われわれは、ウェーバーの言う「呪術」から完全に開放されているわけではない。そしてわれわれはまだ、幸いなことに「末人」にもなっていないのである（Weber, 1905=1989）。

## 6. 原初的意識が参加を生み出す過程

### 6-1. 原初的諸意識と参加の関係

靈的意識が参加に影響し、靈的意識、自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性が全体として原初的意識という1つのシステムになっているとするならば、靈的意識以外の原初的な諸意識も参加に影響するはずである。このあたりのことを検討するために、5つの原初的な諸意識と参加の相関関係を示したものが表10である。表からは、靈的意識、象徴志向、共振性が政治参加に関係し、靈的意識から共振性までのすべての意識が社会

参加に関係することがわかる。このように、参加との関係の強さは政治参加と社会参加の場合で異なるが、注目すべきは、5つの意識の中で参加に影響を与えていないものはないということである。すべての原初的意識は何らかの形で参加に影響を与えているのである。

表 10 原初的諸意識と参加の相関

	霊的意識	自然志向	象徴志向	儀礼志向	共振性
政治参加	.268**	.047	.133*	.015	.117*
社会参加	.391**	.301**	.142*	.183**	.379**

N = 287

\*\*p<.01 \*p<.05

## 6-2. 問われるべき問題

ではなぜこの原初的な意識が参加に影響を与えるのだろうか。この問いについて考えていくうちに、われわれは自分たちが1つの困難に陥っていることに気づく。

すでに2節においていくつかの例を紹介したように、参加の説明は、たとえば次のような形でなされる。「同業団体の加入者が参加に熱心なのは、それを通して自己の所属する集団の利益、ひいては自己の利益を実現するためである」。この説明は、(1)人は個人の利益の実現を求める、(2)団体加入者の政治参加は個人の利益実現につながる、それゆえ(3)団体加入者は政治参加に熱心である、というスタイルになっている。このことは、参加の本来の要因は人の利益実現要求であり、それを媒介するものが団体加入であるということを意味している。

ところで、本稿で検討している「原初的意識」についてはどうなるのだろうか。この「原初的意識」は決して「団体加入」のような位置には置けない変数である。「団体加入」の場合はその前に「利益実現要求」という変数が置けた。しかし、「原初的意識」はその前に、それに影響を与える別の変数を少なくとも社会学の領域では置くことができない<sup>(9)</sup>。それは利益実現要求と同様、分析のもっとも基礎となる変数なのである。原初的意識は、さらに原初的な何かによって説明されない。少なくとも社会学の領域内では説明されないのである<sup>(10)</sup>。

したがって、われわれは、「原初的意識がなぜ参加を引き起こすのか」という問いではなく、「原初的意識がどのように参加を引き起こすのか」という問いを立てなければならない。前者の問いは、原初的な意識に先立つより原初的な意識を探ることに他ならず、そのようなことは社会学の領域内では不可能である。後者の問いは、「原初的な意識が何を生み出し、それがどう参加につながるか」ということに関する問いであり、これは解答可能な問いである。

### 6-3. 原初的意識と同類への愛着の指標

では、「原初的な意識が何を生み出し、それがどう参加につながるか」という問いの検討に向かおう。まず、原初的意識についての総合的な指標を作成する。表 11 は、霊的意識、自然志向、象徴志向、儀礼志向、共振性の各スコアを主成分分析にかけた結果を表している。表からは、第 1 主成分で、全分散の約 45% が説明されていることがわかる。この説明率はさほど高いとはいえないが、他の主成分に比べるとずっと大きく、第 2 主成分から第 4 主成分までの説明率（それぞれほぼ 15%）や、第 5 主成分の説明率（7% 程度）を大きく引き離している。表からは、各原初的諸意識と第 1 主成分の相関は最低で 0.53、最大で 0.84 程度あり、第 1 主成分と諸意識との相関もある程度高いことがわかる。そこで、この第 1 主成分の主成分得点を、原初的意識スコアとすることにする。

表 11 原初的諸意識の主成分分析

主成分	分散の説明率			主成分との相関（負荷量）				
	固有値	分散の%	累積%	霊的意識	自然志向	象徴志向	儀礼志向	共振性
1	2.243	44.854	44.854	.707	.530	.589	.634	.844
2	.887	17.743	62.597	.283	.669	-.240	-.543	-.083
3	.766	15.326	77.924	-.260	.157	.752	-.240	-.225
4	.731	14.627	92.551	-.513	.496	-.169	.432	-.088
5	.372	7.449	100.000	.298	.024	.034	.243	-.472

さて、原初的意識が生み出すであろう意識の内、参加に関わるような意識にはさまざまなものがあるだろう。そのようなさまざまな意識の内、ここでは同類への愛着に焦点を置いて分析を進めていくことにしたい。社会参加にせよ、政治参加にせよ参加には必ずコストが伴う。ボランティア活動に参加することにもコストが伴うし、投票に行くのにもそれなりのコストが伴う。にもかかわらず、人がコストを支払ってまで参加するのは、そこに対象への愛着があるからだと思われる。集団への愛着や他者への愛着がそこに存在するのである（小林・堀川 1996；小林 2012）。そんな愛着の中でもっとも一般性の高いものは、ヒトという同類への愛着だろう。そんな愛着はおそらく、社会参加に影響を与えているだろうし、政治参加にも影響を与えているかもしれない。そして、こうした同類への愛着も、原初的意識と関係しているのではなかろうか。すべてとは言えないものの、部分的にはわれわれの原初的意識から生み出されたものと予想できる。

ここでは、同類への愛着の指標を調査の中の「人類への愛着」の項目と「戦争のニュースを見ると、その国の住民や子どもたちのことが心配になる」という項目を使って作成することにしよう。「人類への愛着」項目は、人類に愛着を感じるか否かを「すごく愛着がある」「かなり愛着がある」「やや愛着がある」「あまり愛着がない」「ほとんど愛着がない」「まったく愛着がない」の 6 つから選ぶという形になっている。「戦争のニュ

ースを見ると、その国の住民や子どもたちのことが心配になる」への回答は「思う」から「そう思わない」までの5反応形式である。同類への愛着スコアは、この2つの項目を主成分分析にかけた際の第1主成分得点とする<sup>(11)</sup>。

#### 6-4. 原初的意識が参加をもたらす1つの道筋

では、分析に向かおう。分析に際してここでとる方針は次のようなものである。まず、同類への愛着から政治参加と社会参加を説明する回帰モデルを作成する（モデル1）。次に、同類への愛着と原初的意識から政治参加と社会参加を説明する回帰モデルを作成する（モデル2）。そして、政治参加と社会参加それぞれについてのモデル1とモデル2の回帰係数を比較することによって、原初的意識がどのように参加に影響するのかを考えるのである。

表 12 原初的意識・同類への愛着・参加の重回帰分析

	政治参加		社会参加	
	モデル 1	モデル 2	モデル 1	モデル 2
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
同類への愛着	.159**	.091	.397**	.249**
原初的意識		.141*		.307**
R <sup>2</sup> 乗	.025	.041	.158	.230
調整済 R <sup>2</sup> 乗	.022	.034	.155	.225
N	287	287	286	286

\*\*p<.01 \*p<.05

表 12 にはこのような方針のもとで得られた分析結果が示されている。政治参加については、モデル 1、モデル 2 とも決定係数が低く、それらは決してよいモデルとは言えない。ただし、回帰係数の変化については興味深い結果が示されている。モデル 1 では有意であった同類への愛着が、モデル 2 ではもはや有意ではなくなっている。この回帰係数の減少は、同類への愛着が原初的意識によって影響されていることを示している。

社会参加についてのモデル 1 とモデル 2 については、とても興味深い結果が示されている。同類への愛着という 1 つの変数だけのモデルで、社会参加の約 16% が説明でき、これに原初的意識を加えたモデル 2 では、社会参加の 23% もが説明できる。2 つの変数だけで、このように高い説明力があるのには少々驚いてしまう。回帰係数の変化もまた興味深い。同類への愛着の回帰係数は、モデル 1 からモデル 2 になる過程で大幅に減少している。これは、政治参加の場合と同様、同類への愛着の基礎には原初的意識が存在していることを意味する。そして、社会参加においては、同類への愛着、原初的意識の双方が影響を与えているのである。

以上、原初的意識の参加への直接的・間接的な影響について見てきた。分析結果よ

り、原初的意識は参加の重要な要因と認定してもいいだろう。その程度は、政治参加の場合、社会参加の場合よりも弱い、それでも影響は確かに存在するといえる。原初的な意識は、直接的・間接的に参加をもたらすのである。

## 7. おわりに

本稿の最初の課題は「幽霊を信じる人ほど投票に行く傾向がある」「幽霊を信じる人ほどボランティア活動をする傾向がある」というかなり奇妙な命題について検討することであった。この最初の「幽霊と参加」の問題は、社会的存在としての人間の原初的な意識と参加の問題としてとらえなおされ、検討を加えられた。得られた結論は、霊的な意識を含む人の原初的な意識は、直接的・間接的に参加をもたらすということであった。

原初的な意識は産業社会の中にはどうもすっきりと位置づけられない。にもかかわらず、人はこの原初的意識の発現を求めることをやめないようにも思われる。数々のイベント、超自然的なファンタジー、そういうものを人は渴望しているのである。この意識は当然のことながら、政治参加や社会参加の場面にも向かう。現代政治における「劇場政治」や「ポピュリズム」はこの原初的意識と直接関係しているだろう。社会活動の場面における「きずな」の重視にもこの原初的意識が関係している。種々の儀礼、象徴、超自然的なもの、そして共振性、そういったものへの人びとの志向性から政治や社会を眺めるとき、われわれがしばしば忘れていた根源的な意識の影響の大きさに驚かされることがある。こういった深層要因を考慮することによって、政治や社会の領域において、どうにもうまくとらえられない問題を考える際の新たな切り口を発見することも可能なのだ。

われわれとしてはこの原初的意識の重要性について説得的に議論しようとしたが、強引な議論であると感じる読者もいると思う。疑念をもつことは本稿の場合、当然の権利だと言える。というのは、最初に述べたように、本稿は、人びとの社会意識の深層にあるいわば地下水脈がどうなっているのかということについての1つの仮説を提出しようとするものであって、それを検証するものではないからである。本稿の議論を「正しいものだ」と「強く」主張するためには、さらなる検討が必要となることは言うまでもない。より広く深い検討を続けていきたいと思う。

### 注

- (1) このような研究の動機について、詳しくは小林（2005）を参照されたい。
- (2) 齋藤純一は、「情念と政治」と題された『思想』（1033号）の特集の巻頭で、「情念」という視角は、「利益」や「理性」には還元しがたい政治社会の複合的な諸相に光を当てることができるのではないかと



と述べている（齋藤 2010）。「幽霊と参加」という本稿のテーマは齋藤らのこうした問題意識とも関わる。

- (3) 今回使用するデータは、2012 年 10 月に同志社大学で行われた調査から得られたものである。調査対象は同志社大学に在学する 1～4 年生であり、調査方法は講義を利用した質問紙法の集合調査である。有効回答数は 302。
- (4) この第 1 主成分で霊的感覚に関する両質問項目の回答の分散の 79.1% が説明される。各質問項目の回答と主成分との相関は 0.889 である。この得点は、それぞれの項目得点を標準化して足し合わせ、その得点を標準化したものに等しい。霊的感覚スコアの平均は 0、分散は 1 になる。
- (5) この第 1 主成分で霊的信念に関する両質問項目の回答の分散の 82.3% が説明される。各質問項目の回答と主成分との相関は 0.907 である。霊的信念スコアの平均は 0、分散は 1 になる。
- (6) 第 1 主成分で政治参加に関する両質問項目の回答の分散が 91.8% が説明される。各質問項目の回答と主成分との相関は 0.958 である。政治参加スコアの平均は 0、分散は 1 になる。
- (7) 第 1 主成分は社会参加に関する全項目の分散の 56.0% を説明し、各項目との相関は最小で 0.553、最大で 0.848 である。社会参加スコアも標準化されており、平均は 0、分散は 1 である。
- (8) 「霊的感覚」と政治参加の関係については猿渡（2012）に重要な指摘がある。そこでは、宗教意識が「宗教は、社会に欠かせないものだ」「宗教的な心というものは大切だと思う」の両項目からとらえられる概念的宗教心と、「仏壇や神棚、十字架のようなものを見ると手をあわせたくなる」「何か困ったことがあったとき、神様とか仏様と心の中で叫んだり、お祈りをしたくなる」の両項目からとらえられる体感的宗教感覚（本稿でいう霊的感覚）に分けられ、概念的宗教心は政治参加にあまり関係しないが、体感的宗教心は関係することが示されているのである。
- (9) 構造主義における「構造」の概念もこのような根源的な変数の 1 つである。構造は、記述はできても特定の科学の領域では説明できない。デュルケムの認識論には「人の認識と社会構造の循環的な関係」が見られるし、レヴィ＝ストロースは「構造」を人の精神的プロセスから説明するが、これらはともに「構造」が社会学内で根源的な変数であるため、その説明は循環的になってしまったり、学問領域を越境せねばできないことを示していると思われる（Turner 1991）。
- (10) 原初的意識の生物学的基盤について考える上では、de Waal（2009＝2010）が役にたつ。
- (11) この第 1 主成分で全分散の 67.9% が説明され、第 1 主成分と各項目との相関は 0.824 となっている。

## 文献

- Bellah, R.N., 1973, *Emile Durkheim on Morality and Society*, Chicago University Press.
- de Waal, F., 2009, *The Age of Empathy.*, Crown. (フランス・ドゥ・ヴァール『共感の時代へー動物行動学が教えてくれること』柴田裕之訳、紀伊国屋書店、2010.)
- Durkheim, É., 1893, *De la division du travail social*. (E・デュルケム『社会分業論（上・下）』井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、1989.)
- Durkheim, É., 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*. (エミール・デュルケム『宗教生活の原初形態（上・下）』古野清人訳、岩波文庫、1975.)
- 蒲島郁夫、1988『政治参加』東京大学出版会。
- 小林久高、2000「政治意識と政治参加の動態」間場寿一編『講座社会学 第9巻 政治』東京大学出版会、43–88。
- 小林久高、2005「視点：深層へ」『ソシオロジ』50(2)：149–151。
- 小林久高、2012「公共性の精神的基盤」『社会分析』39：7–24。
- 小林久高・堀川尚子、1996「流動層のコミュニティ意識－その現実と可能性」『ソシオロジ』41(2)：55–74。
- 齋藤純一、2010「特集にあたって」『思想』1033：12–13。
- 猿渡社、2012「基層的な連帯の感覚と投票への参加－投票参加の深層要因に関する試論的研究」『同志社社会学研究』16：71–79。
- 鈴木広、1987「ヴォランティア行為における“K パターン”について」『哲学年報』46：13–32。

- 谷富夫, 2008「ライフヒストリーの可能性」谷富夫編『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.
- Turner, J. H., 1990, *The Structure of Sociological Theory*, Wadsworth.
- 内田樹・釈徹宗, 2013『現代霊性論』講談社文庫.
- Weber, M., 1905, “Die protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus”, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd.1., 1920. (マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳, 岩波文庫, 1989.)

---

## Spirituality and Public Involvement in Japanese Society

Hisataka Kobayashi and Takeshi Saruwatari

---

If we say “People who believe ghost tend to vote and do volunteer activities”, most people must be surprised. But, this seems to be true. In this article, we consider the relationship between spirituality and public involvement. Through the quantitative data analysis, it is shown that the spiritual consciousness embedded in ordinary people —such as belief of ghost or pious attitude toward religious symbol—has considerable effect on political and social participation. Also, the spiritual consciousness relates to the nature orientation, attachment toward symbols, inclination for rituals, and empathy for others. Not only spiritual consciousness, but also all these kinds of consciousness support the public involvement. Taking Emile Durkheim’s argument on religion into consideration, it is considered that the system of these consciousness is basic for all human beings as social animals. This basic consciousness system effects political and social participation directly and indirectly.

**Key words :** Political participation, Social participation, Public involvement, Spirituality, Durkheim

